

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 12 日現在

機関番号：30103

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520478

研究課題名(和文) アイヌ語諸方言の資料整備と音声音韻・文法・語彙の方言差の分析

研究課題名(英文) Preparation of Database and Analysis of Dialectal Difference in Phonetics, Phonology, Grammar and Vocabulary among Dialects of Ainu

研究代表者

奥田 統己 (OKUDA, OSAMI)

札幌学院大学・人文学部・教授

研究者番号：60224151

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：アイヌ語の人称表示の方言差を観察し、方言間の距離が近いことでこれまで知られてきた沙流方言と千歳方言の動詞の人称表示体系に、重要な差異のあることを確認し、この事実が示唆するアイヌ語の人称表示の一般的な傾向および歴史的背景を考察した。アイヌ語の叙事詩のなかに現れる親族語彙について、沙流方言のテキストと静内方言のテキストのなかでの用法の違いを調査した。アイヌ語音声データベースのシステムを試験的に構築した。アイヌ語音声データベースに入力するレコードの整備を進めた。アイヌ語のテキストをデータベース化する際に、動詞内部をできる限り形態素ごとに区切り、そこにタグをつけていく作業を試み、その結果を評価した。

研究成果の概要(英文)：The differences among person marking system of several Ainu dialects have been observed and a prominent difference between Saru and Chitose dialects, which have so far been regarded as very similar dialects, was found. General tendency or historical implication of Ainu person marking system was investigated upon this observation. Difference among kinship terms of Saru and Shizunai dialects was researched using the epic texts of these dialects. The Ainu audio database was experimentally constructed and records for the database have been accumulated. Tagging to the verbs in Ainu text records for the database, focusing upon the grammatical and semantic role of each morpheme, was attempted and evaluated.

研究分野：言語学・アイヌ語アイヌ文学

キーワード：アイヌ語 危機・少数言語 方言差 音声データベース

ruwe ene an hi ne
ようす こう ある こと ーがーである

「串刺しの団子でもたくさんお前は作って（お前が）私に背負わせたようすはこのとおりである。」

さらにこの事実と、静内方言、三石方言、浦河方言、十勝方言、樺太方言などの諸方言の人称表示およびこれまで「中相」とされてきた自動詞化の派生接辞に関する観察とを総合し、アイヌ語には自動詞、他動詞、一般の名詞、位置名詞の人称表示を横断して、「目的格の優勢」と呼ぶべき傾向があることを主張しましたその歴史的含意を考察した。

(2) アイヌ語の叙事詩のなかに現れる親族語彙について、沙流方言のテキストと静内方言のテキストのなかでの用法の違いを調査した。その結果、静内方言の叙事詩では日常会話・散文で用いる mici 「父」 hapo 「母」という語彙のほかに ona 「父」 totto 「母」が用いられ、ona は mici より用例が多いいっぽう totto と hapo の用例数は大きく変わらないこと、いっぽう沙流方言の叙事詩では、用例は多くないものの、日常会話・散文での形である iyapo 「父」 hapo 「母」はみられず、静内方言と同様の ona 「父」 totto 「母」が用いられていること、また沙流方言では ona の対語である unu 「母」という語形も現れるが静内方言のテキストではこの形は稀にしかみられないことなどの観察を得た。これらの観察を総合すると、予想どおり叙事詩においては日常会話・散文ほど方言差が大きいといえることができる。

(3) アイヌ語音声データベースのシステムを試験的に構築し、切り出し音声と切り出しテキストとがリンクしたかたちでの閲覧および単語検索結果（用例出力）と音声とがリンクしたかたちでの閲覧を、WWW上で実現できるようになった。画面のイメージは図 1 のとおりである。

(4) アイヌ語音声データベースに入力するレコードの整備を進め、約 27,000 レコードについて上記システムの実験運用を開始した（未公開）。

(5) アイヌ語のテキストをデータベース化する際に、動詞内部に同時に現れる要素を検索可能にしてどの要素同士が結びつきやす

いのかを把握するために、動詞内部をできる限り形態素ごとに区切り、そこにタグをつけていく作業を試みた。その結果、従来から所属形の名詞は統語的には「場所」として扱われるという指摘があったが、語中に表れる場合は、概念形でも「場所」として機能しており、この点が統語的な目的語となる場合と異なっていることが確認された。またタグを設計する際には、形態／統語／意味それぞれのレベルが一つの要素に表示できるようにすることが、データベースを活用した効果的な文法研究のためには必要であるという提案を行った。

(6) 当初の研究計画のうち、とくに音声・音韻面の方言差についてはまとまった成果をあげることができず、今後の課題とせざるを得なかった。

図 1



5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 2 件）

- ① 奥田 統己、アイヌ語の部分再帰接頭辞と自動詞化、北海道方言研究会報、査読無、第 91 号、2014、pp. 84-89
- ② 奥田 統己、アイヌ語の挨拶表現と「イランカラプテ」キャンペーン、北海道方言研究会報、査読無、第 90 号、2013、pp. 49-55

〔学会発表〕（計 3 件）

- ① 奥田 統己、アイヌ語の部分再帰接頭辞

と自動詞化、北海道方言研究会第210回例会、2014年11月9日、北海道大学

- ② 奥田 統己、アイヌ語の挨拶表現と「イランカラプテ」キャンペーン、北海道方言研究会第205回例会、2013年11月10日、札幌市北区民センター
- ③ 奥田 統己、アイヌ語の人称表示における『目的格』の優勢、「日本列島と周辺諸言語の類型論的・比較歴史的研究」アイヌ語班第2回研究発表会、2013年11月3日、国立国語研究所

〔図書〕(計 2 件)

- ① 奥田 統己 他、北海道出版企画センター、アイヌ語研究の諸問題、2015、pp. 27-36
- ② 奥田 統己、田村 すゞ子、小林 美紀、松原 務、札幌学院大学、アイヌ語の文法・語彙の方言差の研究とデータベース構築・活用、2015、80

6. 研究組織

(1) 研究代表者

奥田 統己 (Okuda, Osami)
札幌学院大学・人文学部・教授
研究者番号：60224151

(2) 研究分担者

白石 英才 (Shiraishi, Hidetoshi)
札幌学院大学・経済学部・准教授
研究者番号：10405631

(3) 連携研究者

菊池 英明 (Kikuchi, Hideaki)
早稲田大学・人間科学学術院・教授
研究者番号：70308261